(Ⅳ－39)

問題発見型研究の事例報告
―観光研究におけるアプローチ―

山梨大学土木環境工学科　○学生会員 松村　純
山梨大学土木環境工学科　フェロー 花岡　利幸
山梨大学土木環境工学科　正会員 大山　勲

1．研究の背景・目的

世の中には混沌とした問題がある。そのようなことに対し、どのような切り口で立ち向かい、解決していけばよいかを観光研究学会分科会「ゆたかな旅と観光地研究会」の事例を通して報告する。

2．問題発見の構造

混沌とした問題、いわば「形にならないもの」と「何かを介して形になるもの」の間には断層がある。

Breakthrough(現状打破)することで断層を埋めることができる。

また、**Breakthrough(現状打破)**によって新しい課題が生まれる。(図1)

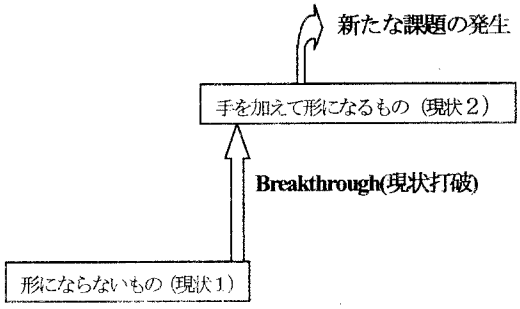

図1

breakthrough(現状打破)するためには、例えば以下のようなやり方がある。

現地調査、事例収集、研究会、文献調査、ヒアリング調査、アンケート調査、ワークショップ等

3．観光計画における問題へのアプローチ

ここでは具体的に、観光計画の研究会である「ゆたかな旅と観光地研究会」(以下「研究会」)の事例を通して説明する。

そもそも研究会がつくられたのは、近年休暇制度が充実してきて自由時間が多くなり、観光旅行への志向がより高まっている。このような状況でありながら国内観光地は低迷しているといった問題が起きている。

これは、観光客の価値観の変化に受け入れ側が対応出来ておらず、観光客と受け入れ側でミスマッチが起きていることが考えられる。

そこで「旅におけるゆたかさ」とは何かを探るべく、「研究会」がつくられた。そして、「新しい時代に求められる望ましい観光のあり方の研究、提言」を目的としている。

図1でいう「形にならないもの」は、この場合「旅におけるゆたかさ」ということになる。そして、「何かを介して・・・」の「何か」とは、ここでは「研究会」ということになる。

5．研究会活動の流れ

研究会が行った活動の流れの概略を図2に示す。

6．「研究会」の成果

「研究会」の成果は、図1の「手を加えて形になるもの」(現状2)に相当する。

・旅における「ゆたかさ」の概念がわかった。
(→「ゆたかさキーワード」として21語抽出)
・「ゆたかさキーワード」を実現するための必要条件がわかった。
・観光客と観光地住民の考える「ゆたかさ観」には違いがあることがわかった。[2)]
・発地側と着地側、年齢による「ゆたかさ観」の違いの分析が行われた。属性などによって異なる「ゆたかさ観」もあるが、共通する項目も見出された。[3)]

キーワード：問題発見、研究会、観光
山梨大学土木環境工学科（山梨県甲府市武田　4-3-11）

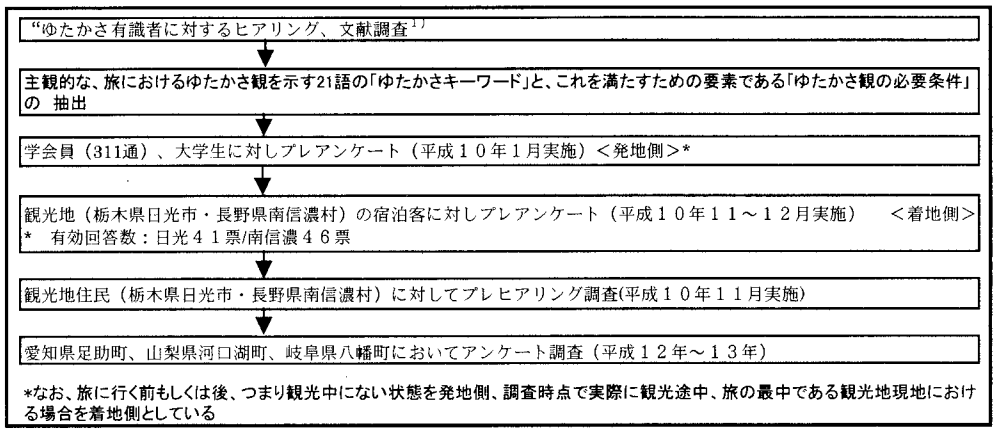

図2 研究会活動の流れ

7．まとめ

ここでは、研究会の意義とは何かを述べる。

第1に、専門家の集まりである「研究会」を設けることによって、研究活動に対する住民や自治体などの信頼性を高められることである。

例えばアンケート調査を行う場合について考えると、1個人が行う場合であれば行政等の協力を期待しにくいが、専門家の集まりである研究会が行うアンケートとなれば、実施した場合の見返り(専門家同士の意見交換によって得られる洗練された提案)と効果が期待でき、観光協会等が協力体制となってくれ、さらにはそこからの補助によって実施できる場合がある。

実際、「「ゆたかな旅と観光地研究会」が平成12年～13年に行ったアンケート調査でも、観光協会との共同で実施している。

また、アンケートに回答する側からすると、答えたことによる見返りがなければ回答する意欲がうせてしまい、高い回収率を期待できない。

ところが研究会が行えば、行政等から補助してもらえることが考えられるから、補助金によって、「回答してもらった方に抽選で粗品を提供する」といったことが行え、またその効果が期待できるから、意欲的に回答してもらえる可能性がある。

第2に研究会は、仕事を生み出すきっかけとなる点で意義あるものである。

つまり、コンサルタントや大学教授等の有識者が含まれている場合、ただ研究を行うだけでなく計画、さらには実行を目的としているからである。

先に述べたように「研究会」は住民等に対する信頼性を高められるから、近寄りやすい体制をつくって住民を巻き込み、お互いが問題意識を向上させることによって計画、実行に移しやすくなるという点で有効であると考えられる。

8．結論

混沌とした問題に立ち向かい解決するためには、第3者が信頼のおける「研究会」のような集団をつくり、第3者に理解を求めていける、近づける体制を作ることであるということがわかった。

【参考文献】

1）観光研究学会ゆたかさ分科会：平成9年度活動報告書「旅におけるゆたかさとは」(1998.5)

2）観光地における‘旅のゆたかさ’に関する研究（久保拓夫、花岡 利幸（1999））

3）旅行者における「旅におけるゆたかさ」観の考察（阪井 暖子（1999））

2）、3）の論文は、「日本観光研究学会第１４回全国大会論文集（１９９９年１０月)」ｐ２７９～２９４